

## 奠(董)

奠(董)は、黄と土との合字です。中国の黄河の上流には広大な地域にわたって黄土層があります。この黄土が黄河にとけこんでいつも黄色く染めているのです。黄土は、質は至って細かい、粘って扱いにくい土です。それでこの黄土で、“細かい”“扱いにくい”という意味を表わしたのです。音は、黄<sup>コウ</sup>から変化してカン(kan)です。また、土(to)の音が加わってタン(tan)とも発音されます。

艱は、“扱いにくい”という意味の奠と、根元の意味の良との会意形声字。“ひどくむずかしいこと”“なやみ”という意味を表わしています。艱難。

難は、奠(タン)という鳥(隹)の名が本義です。羽が金色をしてとても美しく、手に入れることが大変に“むずかしい”鳥なので難(扱いにくい鳥)と名付けたものでしょう。今は、単に“むずかしい”という意味に使われています。音は奠が変化してナンになりました。困難、難問。

嘆は、“ああ！ むずかしいなあ”と思わず口につぶやくことです。“なげく”という意味の字です。嘆声はなげきの声。「感嘆」は“すばらしいなあ”と思わず声を出して感心すること。

歎の欠は、𠂔で、口を大きく開いた形を象った部首です。従って、

歎は嘆と全く同じ意味に使います。感歎、歎賞。

謹は、“細かい”“緻密”の意味の董と言との会意形声字です。言葉少なに、つつしみ深くもの言うことが謹です。“つつしむ”と読んでいますが、行ないや心をつつしむのは「慎」で、“言葉をつつしむ”のは「謹」です。謹言、謹啓、謹慎(言と行ともにつつしむこと)。

僅は、“人が少ない”というのが本義で、今は、人に限らず、物の少ない意味に広く使われています。わずか、僅少。

饑饉は、“食べ物が少ない”という意味の字です。作物のみのりが悪く、食糧が不足する状態を「饑饉」と言います。

瑾は、きめの細かい、黄色い宝石のことです。

勤は、きめ細かに心を働かしてつとめる、という意味の字です。力は努力の力で、“つとめる”ことを表わす部首です。勤労、勤勉、精勤。

覲は、諸侯が勤務として、天子や将軍に謁見することを表わした字です。参観交代というのは、江戸時代、大名が一年ごとに江戸に出て将軍に謁見することを言います。

槿は、朝、花を咲かせて、その日の夕方にはもうしぼんでしまうという、“むくげ”の木のことです。僅かの命しかないというので「槿」と名付けたものでしょう。「槿花一日の栄」などと、人の栄華のはかないことによくたとえられます。